男性介護副主任

私は介護の仕事を始めてから 13 年がたちます。その中でたくさんの高齢者の方と出会い介護をしてきました。振り返ってみると、この歳月の中で「良かったこと」「辛かったこと」「大変だったこと」様々なことがありました。正直なところ、自分が経験してきた中で「良かったこと」よりも「辛かったこと」の方が多かったように思います。
やはり、この仕事には「死」というものがついてきます。体調を崩されたり、老衰によって亡くなられたり…とたくさんの方の最期を見届けました。覚悟はしていても、いざその時になると何年もこの仕事をしていても本当に辛い気持ちになります。「もっと自分たちがこうしていれば…」「もっと良いやり方はなかったのだろうか…」など、悔いが残ることも少なくありませんが、そのような経験を通して多くのことも学ぶことができました。
次に「良かったこと」の中で印象的だったことは、苑で取り組んでいる“ちょっこし外出“でのことが印象に残っています。ご利用者の方の家に帰った時の安心された表情や出迎えて下さる家族様の笑顔を見ると、家に帰ってもらうことができて良かったといつも思います。
その他にも生活の中で、食事を全て食べてもらえたことやトイレで排泄ができたこと、話しができたことなど、小さなことかもしれませんが、日々関わっていく中で、このようなことが本当に嬉しく思えるのも介護の魅力ではないかと思います。

最後に、この介護という仕事は一人でできる仕事ではありません。上司や先輩に励まされたり、後輩に助けられたり、また、家族に支えられたりと多くの人の協力があってやっていける仕事だと思います。もちろん知識や技術も必要ではあると思いますが、最後は「心」だと思います。目の前のご利用者のことを真剣に考えてあげることが何よりも大切なことではないかと自分は思います。
この先、世の中は超高齢化社会となっていく中で、介護のプロとして社会・地域のなくてはならない存在になっていけたらと思います。